廣島戰記
後編
九号
加賀吉版
永島福太郎

永島福太郎 錄

永島孟齋 畫

繪本 鹿兒島戰記

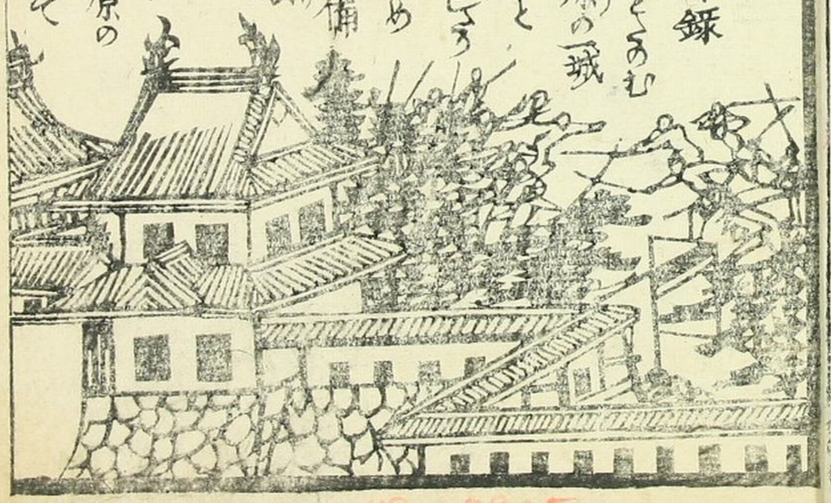
東京書肆 青盛堂版

A445
9

鹿兒島戰記後編九号

東京 永島福太郎錄

偖も鹿兒島の賊兵い都の城をはじめ要地とするむ飫肥宮崎の堅城險地を攻めとさるを佐土原の城ハ籠り防禦の守備をその豐後口の兵と合して再度豐後ハ突入らんとの軍議をはさるるにそれ口の賊兵い去る五月のもつとめ二千余人重岡ハ乱入せしかを警視隊の守備敵ありて容易ハ安ぶる変もあらば梓嶺三河内あたハ激しく接戰をせしうるぶも官軍の兵カ銃ちしてを月以來鹿兒島勢各所ハ敗戰して延岡へ退きそう又佐土原の賊兵いかのことをふ豐後口の味方不利して



48-7905

▲佐土原と攻撃して激

⊕突進する故賊兵防戦

⊕

さる夜のうちに右往左往の賊走りて高鍋ふ防ぐとすれども曾我少将の第四旅団を卒し新佐土原とふ廣瀬城下とり則ち海岸

延岡へ退きしことなりよう大いふ嘆息して兵力をおとせに

官軍三好少将の第二旅団

三浦少将第三旅団あらびに別働第二屯田兵の三隊ハ

八月一日

▲

進むるを進軍し四隊ともに一つ瀬を渉りて高鍋へ

進む大軍烈敵攻立られ賊一戦ふ敗走し延岡城へと退きたり

官軍これと尾撃して同四日美々津川ふ出でたり

賊の敗兵川の向ふ岸

⊖時は翌日早天ら官軍大挙川を渉し賊より打出す彈丸を少しもあたれず

◪あゝ砲墨と熱専ら防禦の用意をなす

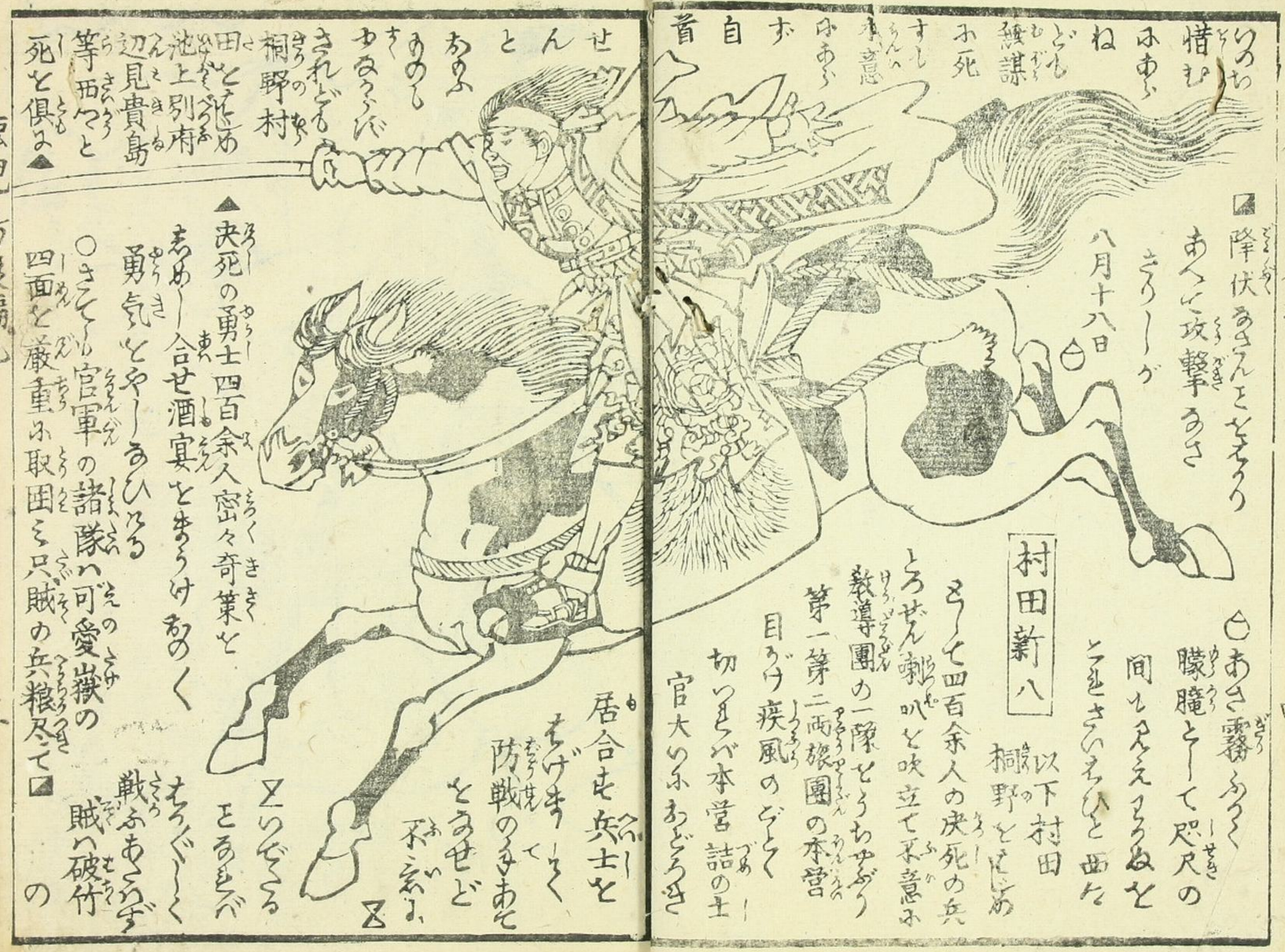
◪

銃鎗をひらめかし無二無三に突入れば賊は
大いに狼狽し散々に敗北す官軍得
たりと堅を築取り遂に追撃して
同八日別働第二の兵い富高新町
より細島をとらしが前日より
大風雨にて出水して道路も損じ
糧米弾薬の運輸も殊の外
難渋なれ海路運船のみ等を定め
らるゝ猶も進んで曾木川に達せり
豊後口の官軍も此処に會し俱に
大挙して延岡城を攻撃せんとす
賊官軍の大兵を防ぎがたく忽ち破れ
て豊後路へ向ひ熊田をさして退くと

官軍急に尾輕まるるを賊徒は
可愛山と梓嶺の山間に分入豊肥
の地方へ突出んとて要害を
各隊四方を取囲み尚口々を
つゝ夫々に配り厳重なれども
間道小道に至る迄
悉く守兵をおき
たるゆへ山間に退縮
あす賊兵しきに狼狽
なりしかも
の道を断ち肌死なるの
外そなれ茲に大将隆盛と
諸士に向ひてやはり

各々不省のそなへを助け数度の戦ひ

尺力をはげ我身を
ろくに此上なあらん
されど運つたなく
連敗ゆゑ人
命と損害一斯く
山間退縮一大軍
四方を取囲め攻迫る
勝利あやつるあ一
然どなさてら
思ふ
子細あれば我と死と共ゆるも又
官軍降伏すると各々の隨意まろさる
べしと西ゆがさと」の言葉を近從ひ来りしあり



惜む
ふあ
ね
とも
無謀
ふ死
すし
本意
ふあ
ず
自
首

降伏あさんとそろ
あくに攻撃あさ
そろしが

八月十八日

村田新八

以下村田
桐野をはじめ

○あさ霧ふかく
朦朧として咫尺の
間も見えざるを
とりさいわいと西郷
さて四百余人の決死の兵
ところせん喇叭を吹立て不意ふ
教導團の一隊をうちやぶり
第一第二両旅團の本営
目がけ疾風のごとく
切つまべ本営詰の士
官大いふあどろき

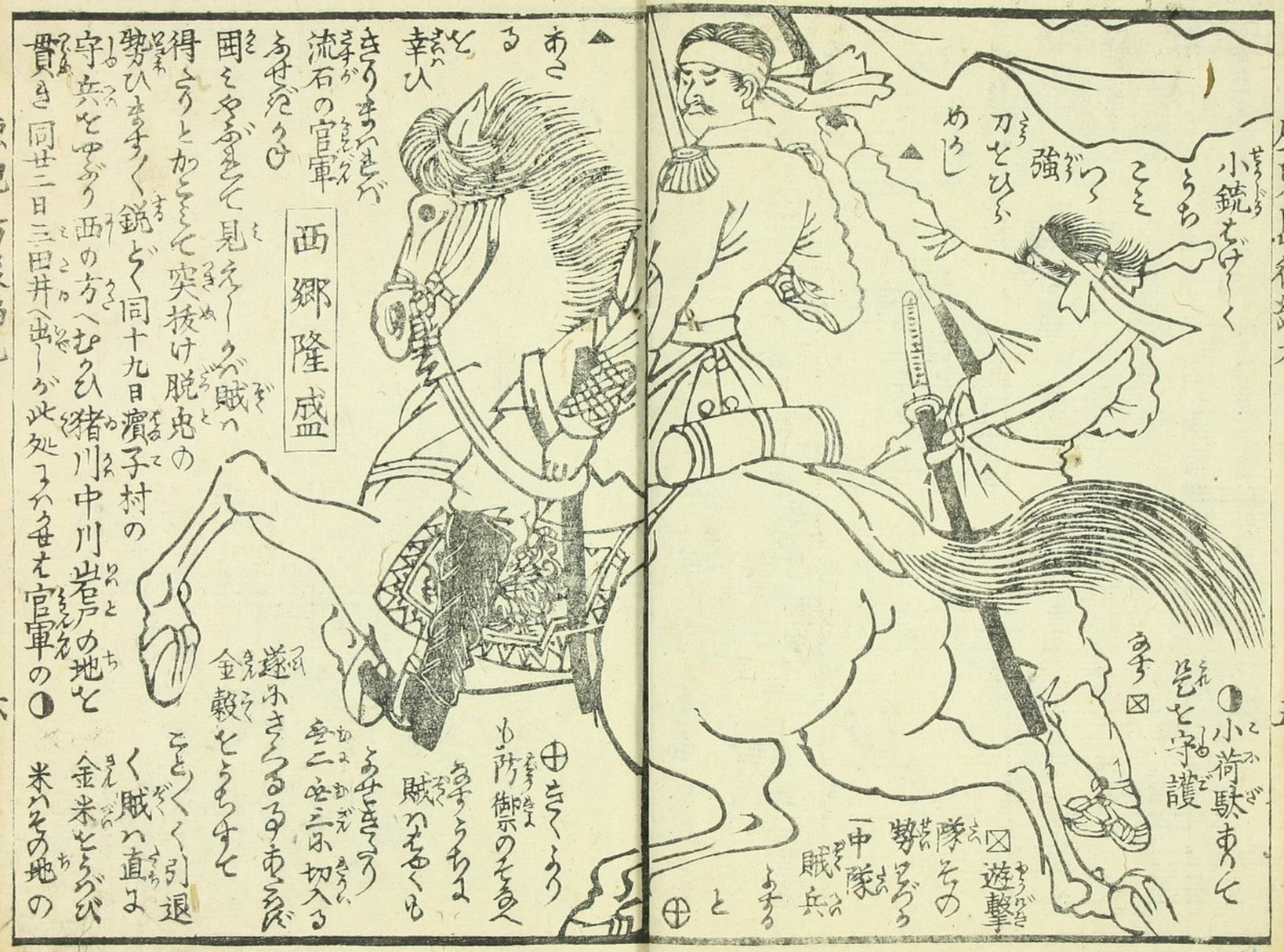
せん
と
あふ
あの
あなつ
されども
桐野村
田と死あ
池上別府
辺見貴島
等西々と
死と倶ふ

▲決死の勇士四百余人密々奇策を
あめ合せ酒宴をもうけあのく
勇気とやしあひる
○さて官軍の諸隊い可愛嶽の
四面を厳重ふ取囲ミ只賊の兵粮尽て

居合せ兵士を
ちげ
防戦のあと
とせど
不ふ

いでる
とるもべ
たちぐ
戦ふあ
賊い破竹

の


小銃をげーく
うちこと
つ
強
力をひらめかし
◐小荷駄あり
を守護
享☒
☒遊撃
隊その
勢ひ
一中隊
賊兵の
あり
と
⊕
あさる
と
幸ひ
きりすてたり
流石の官軍
あせるなり
西郷隆盛
賊をやぶりて見
得
とりとかとりて突抜け脱兎の
勢ひきわめく銃ごく同十九日濱子村の
守兵をやぶり西の方へむかひ猪川中川岩戸の地を
貫き同廿二日三田井出ーが此処にて官軍の◐
米ハその地の
金穀をとりて
逐ひさらるるあり
遂ひ二ヶ所に切入る
ごとくく引退
く賊い直ち
金米をとりて
⊕さくーう
も防禦のそなへ
享うちよ
賊いたくも
ふせきて

平民へ安直にて拂ひ下とらす

さても第一

第二の旅團い

別府新助

賊ゞ死舊の

敵戰ふ一時ハ

備へ乱れ

怒ち隊

伍ゞ

▲整ゞ

賊の

▽いであひ

交戰ふ及び

あれども

賊い進むを

主とする更へ

此ゞ

うち破り

山間へ

ふとけ入り

山まゝ山と

奔走し大隅

地方へすゝを

跡を追ゞ

三田井へ賊兵乱入世

との報知ふ官軍大ふ

おどろき三田井の味方

を援けんとのゝにけんで

進撃せゝゞ賊

彼処占ゞ

と攻うつは賊兵ハ且さらひ

かつ走りて七ツ山の山間ふ

入り行さゝふふうふざう

しゞ三田井より十四五里を

隔絶する南神門へ突出し

美々津まゝ官軍ふ

同三十一日忽然

と高原へ出

警察所と

あゝゝ飯野

小林の地へ

迫り勢ひ

◑烈しゝ

防御ふ

なくゝゝと

都の城の分署より

鹿兒島の縣令へ急報

あり更へ縣令ふ

探偵者を出せ〜ふ賊兵は
三十一日栗野の分署
を
吉田横
川へ押来る
との報知ふ
より

桐野利秋

警視官へ通
達し
出張所の
公用物
書冊ホを取片付
縣官ともども奔走
して弁天堂場まある
弾薬銃器とりこめ官金
ふ至る迄皆悉く取まとめ気船
鹿児島丸ふつことを伊東少将へ談地在
留の兵四中隊の長官と海軍兵二小隊と

合せ率し米庫と本営とし司揮官
綿貫少警視より大門口と廣口の多署
詰の巡査二百廿名へ銃器を与へ重田
二等中警部が二百名を率ひ満田
警部補が百廿名を率ひ防禦の
ため屬官数名と共に出張所
を引ひらき米庫に屯集し
至急米俵を仮の砲塁とし
警察官数名うちより
軍機をとり出兵して戦ふ支よ
決し云へ九月一日の午前一時
のるのありとぞ

鹿兒島後編九号終

010190508078

1